

“交流の家”建設日誌

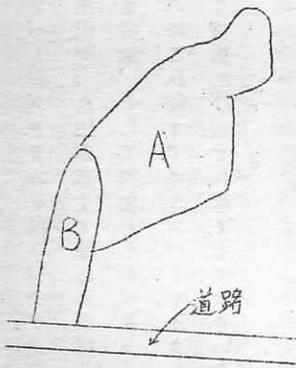
序

長 沢 俊 夫

昭和三十八年の秋、ライ回復者が宿泊を断られた話を聞き、何とか宿泊所を建てようと数名の学生が京都の鴨川の提防に腰かけて、話をしていた。やがて、ある者は生れて初めてライ園へ行ったが、金も土地も技術もなかった。唯意気込みと仲間意識だけであった。そうしてやみくもに動き出した。秋も深くなってから奈良市の西方にある大倭紫陽花邑から土地を寄贈してもらえらることになり十一月十四日委員会で建設を正式決定した。そして十二月街頭募金に立った。声をからして京都、大阪、神戸、奈良と繁華街に立った。約四十万円が集った。いよいよ動き出した。この日記はそれから四年間この家が立つまでの建設日記である。

一建設準備 (S三九・一月〜七月)

昭和三十九年一月某日
贈られた土地は図に示すように半反(百五十坪)の田(図のA)と四十数坪の畑(図のB)で合せ百九十坪の土地であつ



た。しかも道路の畑に接している部分は急坂になっており、段違いになっている。そして田は畑よりもさらに低くなっている。辻征雄(大阪大工三年)を中心に相談の結果「畑を道路にして道路から田まで車が入れるようにしよう。そして建物は田に作るう」ということになった。

三月某日

いま春の長期キャンプが始った。昨年来の募金により約四十万円の資金が出来たが、このキャンプの目標は整地である。田には昨秋刈りとられた稲の根っ子が整然と並び、霜によって白く化粧されている姿は感慨深い。仕事は農村の古来のしきたりに従って、稲の根を堀起こし裏返す作業から始まった。一切の金属やガラスの破片のない良く手入れの行届いた田で、裸足で飛び歩いても怪我の心配は全くない。霜がとけ田がぬかるみになっても、足の冷たさなど忘れて意気は天をついでる。

三月某日

田の裏返しが終わりに、道路の肩をこわし畑と道路を結び余った土を田に入れる作業も順調に進んでいる。土を堀り一輪車で運ぶ単純な作業であるが、キャンパー全員我を忘れて狂気のごとく働く。

土を埋めた田の上では、キャンパーがスクラムを組みジクザグデモをやって踏み固めている。黒色だった田が赤土で埋められ様相は一変してきた。こんな単純な労働、そして対象となるべきライ快復者は誰もいない。それなのにこれ程までキャンパーをかき立てる者は何か。単にライという言葉だけがそれ程までに大きいのだろうか。

五月某日

白石芳弘（京大法三年）の下宿で昨秋来頼んであった阪大工学部建築学科の学生達の好意によって書かれた建物の設計図を前にして、白石芳弘、辻征雄、福田三郎（同志社大文二年）らと共に頭をかかえている。この図面は木造平屋建てであるが、今まで具体的にどうして建てるか考えていなかったのは全く呑気なものだ。最低でも四百万円かかる工事を僅か五十万円程度の手持金で請負ってくれる業者などある筈がない。それ以前にワークキャンプがワークを他人任せにすることはできないといった気分が大きく働いている。さりとてこの大きな建物を自分達だけの手でできるとは、如何に無鉄砲でも不可能は目に見えている。決心ができないから結論はでない。幾杯も紅茶を飲んだ。夜が白んできて空腹にたえかねる。ともかく寝むらう。

翌日

目覚めたのは午前だ。下宿を出て飯を食いに行く。その途中で「大工さんを一、二人頼んでその指導の下でやろう。」「いや、

それでも不可能だ。」等と相変わらず議論百出。深夜に及んでようやくまとまったのは、「金の面とワークキャンプ団体の性質や過去の歴史から考えて、とにかくキャンパーが中心になって建設を進めよう。その結果木造建築が不可能ならせっかくの図面であるが書き直すのはやむを得ない。」ということであった。具体案は翌日。

翌々日

三日目になると言いつくしたのか全員あまり原則論は言わない。とにかくできる範囲の方向を見つけることに一致して話のまとまりは良くなる。幸い大倭事業部がコンクリートブロックの製造をやっている。これを分けてもらう事は可能だろう。ブロック建築なら素人ばかりでもできるだろうと勝手を判断を下して、全員気分だけで一致する。だが、ブロック一コ幾らするやら、ブロックの間いどのような鉄筋を入れなければならないのか、全員全く知らない。まして天井のことなど想像もついていない。

六月某日

私の買ってきた「ブロック建築の実際」という本を白石、辻共に読書をやる。このへんがワークキャンプの楽しいところだろう。

ブロックの大きさが、長さ三十九糎、高さ十九糎で接合部のモルタルによって四十糎の二十糎になることを始めて知った。厚みは十糎から二十糎まで数種あることや、ブロックの内部の空洞の形状も種々あることも始めて知った。ブロック建築では窓や戸口の

ないかへの部分が建物の大きさや間取りの大きさを一定の算術計算をして求めねばならないことも知った。計算によって求められるのはお手のもので、自信が湧いてきた。さて屋根をどうするかで大変な問題が出てきた。二通りの方法があり、一つは木造ないしは鉄骨で作り瓦かトタンでふく方法と、鉄筋コンクリートで作る（これをスラブというのも始めて知った）方法である。

木造や鉄骨でやるのは細かな技術が必要で不可能だろうと勝手に考える。さりとてスラブが出来るものやらどうやら。考えても結論は出ない。出ない筈だ、何も知らないのだから。とにかく出るところからやろうと基礎と壁の図面から書き始めた。天井のことはどうにかなるだろう。「グラフ用紙と定規を買ってこい。」無茶な話だ。

翌日

間取りは木造建築の図面に従ってやろうと書いていったが、ブロックの寸法と合わない。今さらそれが分っても計算しなおすことは大儀だ。はみ出したブロックは飾りになるだろう。とそのまま計算と作図を続ける。窓や出入口の寸法は判らない。この位で良いだろうと下宿の戸を測ったりして、適当にあげる。何とか基礎と壁の図面だけはできた。

六月某日

とにかく夏の長期キャンプがせまっている。図面は基礎と壁だけにして資材の手配を考えよう。後の図面はキャンプ中でも書け

ば良い。書けなくとも何とかなるだろう、ということになった。

春に使ったシャベル、ツルハン、一輪車は大半つぶれている。その他の資材や道具は何もない。基礎の穴を掘るためにツルハンシャベルを買うことにした。基礎は掘った後をつき固め、捨てコンなるコンクリートを打ち、その上鉄筋を入れたコンクリートの土台を巾三十センチ、高さ六十センチ作らねばならない。その土台にブロックを積むのであるが、ブロックの間に鉄筋を入れなければならぬ。この鉄筋は先を曲げて土台に入っていないければならない。コンクリートにはセメント、砂利、砂が必要。それに鉄筋、仮枠用のパネル板、その加工用のクギ、ノコギリ等。一つ一つ手配しなければならぬ。

七月某日

ブロック、セメントについては大倭の矢追家磨呂さんに頼む。一言のもとに快諾、砂、砂利については大倭安宿苑の苑長さんに頼む。これも快諾。更に鉄筋は大阪の間屋街へ車をもって買いに連れて下さるそう。多くの人達の暖い協力で、身がひきしまる。とにかく資材の目途がついて、ワークキャンプのワークが出来ることにホッとする。

七月某日

三月に整地した土地も夏草が繁っている。これを刈って、基礎の位置を定める為に測量せねばならないが、大倭の青山日元さんの全面協力に甘える。水準を出す器具や墨付け器を自ら持参して、

テキバキ、キャンパーを動かしながら仕事が進む。水平を出す水板のくい打ちから始まり、直角を得るために大きな三角定期を作る。どうにか水平と柱の中心位置が定まる。意外に大きな家で外面とは全く感じが異なり、果して建つや否や少々不安気味。尤も、こんな気持は表に出すことは出さなから何でも知っていた振りをしている。

二着工 (S三九・七) 八月夏期ロングキャンプその一)

七月某日

いよいよキャンプ初日。今日は起工式。昨夜より起工式に列席して頂ける多くの人々がぞくぞくとサイトに集まる。藤楓協会の理事長始め全患協の事務局長、近隣の各担当官等々。建物の敷地の四隅には大きな竹が四本立ちしめ縄が飾ってある。中央に祭壇があり、立派な起工式風景だ。いよいよ式の始まり。真夏の暑いさなか全員汗をふきふき神妙に並んでいる。白装束の大倭の矢追日聖氏によって式の執り行いが進められた。途中大倭門人の多くが靈動を起こし、あちらこちらでふるえたり、大きく手を上げて空をあおいだり、地にひれふしたりしている。白昼、感動とも異様とも言えぬ光景。

キャンプ翌日

建物の週辺及び間仕切りに当たる部分を、深さ百二十センチ巾八十センチの溝を掘る作業から始まった。溝の総延長は百二十メ

トルにも及び、それに便所の便槽の穴は深さ二メートルで四メートル四方。予定では二日半の工事。働くキャンパーは約三十人。ツルハシとスコップを持った四人づつが一組で七ヶ所から掘り進んだ。威勢は良いが仕事は仲々進まない。今春埋めた赤土を約三十センチ掘ると田の黒い土が出てきた。それを三十センチ掘ると地盤の赤い土が再び出てきた。この地盤の堅いこと。

キャンプ五日目

予定をこえて、穴掘りに三日半かかった。キャンプの予定は二十日間。このキャンプでどこまでやれるか未定であるが、先の心配をするどころか日々の日程を懸命にやるだけで手一杯。明日から次の工事にかかる訳だが、それは掘った穴の中に基礎の土台となる栗石を入れてつきかためることだ。それに便槽も作らねばならない。便槽の仮枠組用の材木は仕入れてある。捨てコン用のセメント、砂利、砂は入荷した。コンクリートミキサも大倭の好意によって借りられた。何とかなる。

夕方某キャンパーから問われた。「ワークの見通しはどうなんだ。この調子でキャンプ最終日にはどうなるんだ。どこまでやるつもりなんだ。」と。見通しなんて全くない。どう考えてもこの調子ではせいぜいブロックを数枚積んで終りそうだ。まして天井のことなんか全く考えていない。返事のしようがない。その昔、宝塚の「希望の家」キャンプではキャンプを少し延期して月光りを頼りに真夜中までかかって家はキャンプ中に完成したことが頭

の中にちらっと走った。それなのにこのキャンプでは基礎工事の上でブロックを数段積むだけで終りそうだ。天井や内装のことなどてんで頭に残らない。しかしキャンプが終ればキャンパーは帰って後には誰も残らない。大倭の好意で拝殿を宿舍に利用しているだけで飯場も道具置き場もない。中途半端でブロックの鉄筋がさびるにまかせて来春までほおっておけるか。リーダーの白石や辻も来春卒業。僕も来春再びきてワークをやる自信はない。ぐーのねも出ない。某キャンパーは続ける。「このキャンプで完成しなかったら家など建たんぞ。こんな運動は盛上った時に一気にやると何でも出来るが、だからだと長くかかり一旦熱がさめると、どうなるかわかるものか。」その通り。全く異議なしだ。「お前ら素人が図面を計算して書いたかも知れんが、建て物なんて幾らていねいしてもきりがないんだ。だがそんなことでは家は建たん。一定の工期で完成させる為には妥協が必要なんだ。捨てコンの上で鉄筋を細み高さ八十センチのコンクリートの基礎その上にブロックを積むなどもつたいない。どこにそんなていねいな工事をしてるのか。」成程、建築基準法の本を読み、それに従って計算して図面を書いたが所詮現場を見たことも働いたこともない。多くの工事現場でそんなことしていないと言われれば全く反論の余地はない。しかし、それでなくても自信がなく不安にかられながら工事を進めているのにせめてのよりどころである建築基準に従った計算により進めている工事を変更することは、よりどころを完全

に失ってしまう。反論は出来ないが賛成もできない。「現場を良く見ている我々が言うのだから間違いはない。とにかく捨てコンを厚くしてその上に基礎用の十五センチのブロックを二段つみ、その上に普通のブロックを積み。それを三日でやってしまつて来週は天井のスラブだ。これは大倭の人々の全面協力を願って一週間でやるんだ。とにかくキャンプ中に家の形をなしてしまつて内装は秋の週末キャンプに少しづつやれば出来る。」一言もないがそうとは返事できない。が、翌朝からの仕事の問題でそのまま延ばす訳にはいかない。問題の決定をこのキャンプのリーダーでありFIWC関西の委員長である白石に預けた。深夜になり、結局白石は今夏一気に完成させる方向を選んだ。図面を書いた者としてそうしたくないが、見通しを全く持っていない者にとって、文句が言えない。真夜中、池の側で辻が泣いている。判り過ぎる気持ちに声のかけようがない。

キャンプ六日目

とにかく基礎の溝の中に桀石を入れ、つきかためている。それに便槽の大きな穴にも桀石を入れている。急に変更になつた工事日程の為、ブロック用の鉄筋を桀石のところへ直接差し込み捨てコンで止めようという訳だ。急拠鉄筋曲げの台を作り適当な長さに切断し先端を曲げる仕事。立てた鉄筋を止める材木を用意させる。工事日程の変更については、キャンパー誰も知らない。技術的な問題を素人の全体討議にかけても仕方がないが、結局は運動の永

統性の展望にかかる問題だ。数人で処理してしまった。うしろめたさが気になる。

キャンプ十日目

明日はオーブンデイでワークは休み。その為か全員張切っている。仕事はそれ程思い通りとは言えないが二十センチの捨てコンを打ちその上に十五センチのブロックを積みその上に十二段積む十センチのブロックも、三段から四段の高さになった。巾八十センチ、厚さ二十センチのコンクリートを約百二十メートル打つには随分多くのコンクリートが必要だった。朝から夜までミキサを回していた、樋口邦彦（阪市大経一年）はついに喉にセメントがつまっていたかたまってしていると医者に見された。牛乳で始めてブロックをつんだ山上憲一（大阪大文一）は半日かかってやっと七ケをつんだ。中には三十ケ程つんだキャンパーも居たが、全く凸凹。どうなることやらと思ったがやはり習うより慣れるで、二日三日としてくると少しづつ上手くなる。

三逆転（S三九・七月〜八月夏期ロングキ

キャンプ十一日 ヤンプその二

今日はオーブンデイ。朝から握り飯を作って木津川に水遊びに出掛けた。サイトに残ったのはたった三人。キャンパーが出かけた後、明日からの工事予定を考える。先日来たほど元気がない。午後二時過ぎ図面から目をはなしふっと窓の外を見ると、裏の方から数十人の農村の人達が細い峠道を一列に並んでこちらの方にゆっくり歩いてくる。何事かと思つて暫く見つめる。そのまま真

直ぐ歩いて大倭の日聖氏の家の前の広場の方に歩いていく。野次馬気分を外へ出てその後についていく。福田三郎（同志社大文三年）が向うの方から「何だ、何よ」と言いながら走ってきた。大倭の子供達もそろそろ集まってきた。そのうち日聖さんが家から出て歩いてこられた。「矢追さん、学生達に「家」の建設をやめさせて下さい。せっかくこれから開けようとしているこの地方がこんなライの家を建てられたらどうなる。」家の建設に対して反対の声の聞いたのは始めてであった。あまりに突然で何とも感じなかった。「法主様、先日私達が連名で学生達に土地を提供するのをやめて欲しいとお願書を出したのになしのつぶて、それに建物もそこまでできている。これ以上ほっておく訳にいかない。」「私に土地の提供をやめると言ってもそれは出来ない。学生が要らないと言ひならそれまでだが。」双方一歩も引かないなあと他人事で聞いているとほこ先はこちらへ。「君達学生は若さの正義感でやろうとしていることは判る。しかし君らは、やるだけやって卒業してしまふとどこかへ就職して行ってしまふだろう。後に残ってずっと住む我々はどうなるんだ。土地は値下りする。他人は近寄りらん。ここからずっと下手にある我々の土地は、水がここから流れてくる以上田に入れん。君ら他人を苦しめてどう思うんだ。」どう答えてもこの意見を誤りだと言ひすることはできない。農村の人達の話を聞きながら、今まで一年間この運動を続けてきて常に建てよう建てようと考え、建設反対の正面切った意見は聞い

たことも考えたこともなかったことを思い出していた。地元といつても、全面協力をしてもらっている大倭の人達以外、建設現場から見渡す限り一軒の家も見えない。そんな人達から地元の反対といわれて呆然とすると共に、都会的な感覚の甘さを身にしみていた。向う側で福田がつかまっている。「君は三年だろ。再来年は居なくなるんだろ、そうだろ。」「いや、僕はずっとここにきてやるつもりです。」「つもりとは何だ、はっきりしろ。」「ずっとやります。」しかし、それで話のつくものではない。四時過ぎになる。木津川に行つたキャンパーがもどってきた。陽気に歌いながら帰ってきたキャンパーがこの光景を見て緊張する。静かに集団の中へ入ってきた。「君達がどうしてもやるというならこちらとしてもやむを得ない、自衛手段をとる。第一土地はまだ農地転用されてないのだから。君等不法建築をやっているんだ。若い者には元気のいいのも居る。夜中にこわしにくるかも知れん。警察に行くことなんか何とも思つたらん。子供も学校へ行かさん。大倭の子供が学校の行き帰りにどうなるか判らんぞ。」完全な物分れ。夕食もそこそこキャンパー全員拝殿に集まり、この問題の全員討議。「こんな反対運動があるからこそ、私達が運動をやらんのだ。」等と地元の反対運動が起つたことについては、むしろ意義あることと、とらえた考え方があった。しかし、実際問題として我々は建てることについて懸命であつたし、その他のことまで頭は回っていなかった。農地転用の問題にしても、昨年の秋以

来、時間があつたのに全然考えていなかったし、地元の反対の人達も新聞で知つただけで、私達は地元に対するPRは全くやつていなかった。矢追日聖氏に対する土地提供を止めて欲しいという希望書の存在すら、それまで知らなかった。とにかく反対運動の発生は、我々の運動の単なる障害ではなく意義ある事態の発生としてとらえることは出来たが、今後のとるべき方向については、案の定議論沸騰。これで工事を中止することは、即、敗北を意味する。工事を進めて反対運動も強まつてこそ、そのぶつかりから対話も理解も生まれるんだ。とにかく前提は工事継続だ。強行突破だ。「いや、反対運動を無視して強行突破はますます無理解を増し、我々の運動の意志に反対する人達を多く作ることになるんだ。とにかく、話し合いの方向をさがそう。」夜を徹つし議論は続いた。明け方になり緊急問題として朝からの工事について話をきめなければならぬ。その結果「工事中止はやらない。しかし午前中は睡眠のためワークはできない。午後からは反対運動についてよく調べよう。」と話がついて、結果的には工事中止であるが中止をしない前提で今後の行動をすすめることになった。具体策として、キャンパーを二、三人づつの組に分け、十数組が地元の家を一軒づつ訪問し、良く話を聞いてくること。それから数人は各マスコミ団体や諸官庁へ行き話し合いをすることになった。

キャンブ十二日

午後からキャンパー全員ツルハン、スコップを捨て、地元や奈良

市に飛び立った。昨日までの仕事着を捨て、シャツを着て靴にブラシをかけ奈良へとんだ。夜になって全員集まって、昼間の行動の報告地元へ行った人達の報告を総括すると、「とにかくあなた方の運動の純粹性と正義感は認める。私達に全く関係のない土地でこんな問題が生じたら、多分、気持の上で皆さん方を支持するだろう。しかし、自分達の身近な問題としては嫌なのだ。幾ら気持で理解しても被害があり嫌な気持になる以上は反対せざるを得ない。勿論、昨日のように多くの人が大倭に集まったのは、各戸毎の動員があり行かねばならないから行ったし、発言も激烈になったが、暴力までふるうことはないにしても、嫌だ。」と言った雰囲気である。一方、マスコミ、官庁関係ではとにかく熱心に聞いてくれただけであつた。反対運動の中心は町内会の役員を中心に動き、地元選出の市会議員が地元の要請により奈良市にも働きかけ、とにかく農地委員をかねており、農地転用はこのままでは絶望だ。

キャンプ十五日

地元回りや官庁回りも四日目、連日マスコミもとりあげてくれて各所に動きが目立った。新聞を見て驚いてかけつけてくるキャンパーも幾人か居る。地元の農家訪問も二度三度に及び少しづつ話し合ひは出来るようになったが、話の内容は平行状態。その間夜になると、白石と共に反対運動の会長宅を訪問して話し合う。一種の裏工作であるが、局面転換には必要と思う。一昨日の夜の話し合ひで表向には「ライ快復者宿泊施設」の名はかかげず、交流

の家」とし快復者の宿泊は黙認するといふ線で会長との間で話しがついた。その夜キャンパーの集会ではこの案はまあまあ認められたが、地元の方の役員会で拒否された。マスコミは連日私達に好意的に書いてくれるだけで問題解決には役立たない。遠くから激励の電報や手紙がくる位だ。地元の交渉は相変らず平行線。官庁の窓口は当事者で話し合ってくれなければ介入しようがないと言ひ、市会は休会中であつた動きはない。市長は私達にはっきり「地元が反対している以上、それらの代表である市長としては反対せざるを得ない。」と言ひ切つた。工事は実質的に四日前から止まっている。強行突破を唱える幾人かは今日、日中に数ケのブロックを積んだと報告している。キャンプの予定はあと四日。夏休みの計画あるキャンパーは四日たてば順次帰っていくだろう。秋になれば勿論試験もあり誰も居なくなる。工事は中止のまま、再びお先真暗。唯一つ、強行突破の意見だけが勇ましい。

キャンプ十六日

朝から色々考えてみる。名案は出ず。このまま実質的に工事を中止して、秋から反対運動に対する一大キャンペーンがこの組織でできるや否や。我々の組織力と動員力でどこまでやって家が建てられるような活動ができるや否や。このまま終るのではないかと不安感をもつ。被害者意識をもっている地元の人達を一方的加害者であると考えられている我々が、如何にマスコミに訴え世論に訴えても話し合ひだけで理解して協力してもらえないように出来るも

のかどうか。個々のキャンパーの自発的意志にまつこの集団がどこまで持続力をもてるか。かと言って強行突破したところで大倭の子供が学校でいじめられたり農地転用が不能になり、市長を通じて行政権力の中止命令が出されたり、真夜中の打ちこわしについてどう対処できるのか。理屈では何とでも言えよう。後から振り返って考えれば又別の意見も出てこよう。しかし現実具体的に案が必要な場合、最悪の場合も考慮しなければならぬ。一日中ぶらぶら考えていた。どう考えても正面切った策は考えられない。夕方になってふっと思いついたのは「逆手に行こう」。この家は一応建設する。しかし地元の反対者の納得の得られない間はライ快復者の宿泊はしない」ということであった。ライ快復者の宿泊所が全国のどこにも書いていない宿泊拒否をするのだ。最も激しい差別センターを作るのだ。こんな屈辱的なナンセンスな方法があるだろうか。それをとって受け入れる運動ならつづれた方がましだ。その屈辱をとることにこの集団が全力をつくすならかえって刺激になり運動の継続にもなるし、できなければ徹底した敗北を味わって家をつぶせば良い。ライ快復者の泊まれない建物が完成し、ペンペン草が生い、運動の敗北を見下すならば面白かり。運動する人間が一方的正義で他の人達をケイモウするだけより、運動する人間が立場がなくなり、笑ひ者になるのを必死にかきわける運動の方が面白いのではなからうか。他の運動している人から、お前らは「差別センター」を作ったと笑われるところか

ら出発しよう。ショック療法が強過ぎて組織は死ぬかも知れない。それで死ぬならそれでも良い。

夜、この考え方で地元の会長の家へ行った。会長と副会長、この案なら大丈夫だと言われ二日後に団体交渉をすることになった。キャンプの集会でも多くの議論が出たが結局この案は認められ、二日後に備えた。

キャンプ十八日

昼食後、キャンパー全員がそろそろと団体交渉の会場に当てられた小学校の講堂に向った。Gパンにゴムソウリ麦ワラ帽スタイルが殆んど。予定時間の一時間前に会場に入ると机が向い合せに数多く並べてあった。まだ地元の人達は来ていない。近くの子供達のものめずらしげに見守っている。のどかな夏の午さがりである。ようやく二時に双方全員集合。キャンパーは約五十名。農村の人達は子供も含めて約七十名。それに新聞テレビの記者が数名、及び京大の先生が数名。外には交番所のお巡さんが一人うろろしている。型通りのあいさつと双方のこれまでの主張を言い合う。

会場は整然たるもの。双方の主張が平行線のまま言い合いが約一時間続く。やがて、ようやく妥協点を求める話し合いに入る。

このあたり弁士もその他の人も気合がこもってくる。昨夜の会長との裏交渉を思い出しながらこちらの案を述べる。会長及び役員連中はかすかにうなづいている。その他の農家の人々は真剣に聞き入っている。話が終った時、会長がやおら「それでは皆さん方

如何ですか、学生達もこのように申し立てていることだし、この程度で……」突如室の中央から大きな声で「駄目だ、駄目だ。建てられたら駄目だ。」満場騒然。農家の人達はそれにたられたように口々に「そうだ、駄目だ、学生は出て行け。」キャンパーは意外に冷静。会長や役人は呆然と見守っている。しかしこれを境に双方の言葉が激しくなる。その後は農家の人達の主張は完全に会長や役員から、そうでない若い人達に移り、役員連中はかきの如く口を閉じる。主張もますます激化し、途中京大の先生が仲に入り調停を試みたが全く相手にされず、延々数時間の話し合いも単なる言い合いで終り午後七時決裂のまま散会。完全に振出しにもどる。どうしようもないままキャンプ日程もせまりやむをえずワーカーは放置してフアイヤーや後片づけの段取りに入る。

キャンプ終日

もろもろのことがあった。何も解決していない。しかしキャンプの最終の夜は同じだ。特に従来のキャンプに比べ、オーブンデイの中日を境に内容はコベルニクスの逆転をした。それだけに想いは深く全員何かとりつかれたような明るい顔をしている。今までのキャンプに比べ最もさわぎ没入した夜だった。どうしてよいか判らないがどうかしようかと決意を秘めている眼をかがやせ、腕を組んで夜空に雄々しく合唱する様は、何故か感動的であった。

四 暗礁—長期戦への転換 (S三九・八月)

八月三十日

S四〇・二月)

昨秋、家の構想も計画もない時点で、古家をこわした古建材がとある倉庫に山積されているのを寄附する話があり、ブロックや鉄筋建など毛頭考えていなかった時だけに何かの役に立つだろうと一言のもとに「有難うございます。」と大倭ブロックの人達の世話になって深夜運びこんだ材木が山積み。この材木は大阪の元松島遊廓の大きな建物であり、ピンクの柱やどぎつい飾りつけなど、ほこりまみれの中に異様さを見せていた。キャンプがこのような暗礁に乗り上げた以上、長期戦は必至と無意識のうちにキャンパーが気づき誰ともなく、この古材を使って飯場を建てようともち上った。この話は昨秋以来矢追日聖氏や青山日元さんから度々出ていた話であったが、キャンパーは「交流の家」に目をうはわれ、足許のことは後回しになっていた。

キャンプが終わってからも後に残った福田三郎と宮崎(立命大法二年)は青山日元さんの指導の元に二十畳敷きの飯場をこの古材を使って建設にかかった。中に入れる畳も中古、僅かに屋根のトタンとベンキ及び電気配線だけ新品。十坪の建て物が五万円です坪当り僅か五千円で完成した。日元さんはじめ両キャンパーの奮闘、多謝。

十月中旬

夏休みあけと共に学生の試験期。キャンプ活動は仮眠。ようやく試験を終り十月の委員会。局面は八月の団体交渉の決裂から凍結したまま。再び強硬突破案が出てくる。しかし大倭の子供達の学校の問題をどうすると言われれば沈黙。二、三のキャンパーから農村の人達が四六時中見張っている訳でもない。週末キャンプをやり少しでもブロックを積もうと提案。キャンプの通例として全体の多数で少数意見を押しえることはない。やりたい人がやるのは見守る以外にない。結局数回の週末キャンプをもち、ブロックを積むことになった。

十月下旬

今月になってから度々地元の会長とは京都や奈良で話し合いをもち、交渉のパイプは保持している。いずれも平行線であるが、奈良市長の建設反対声明が先日出されたがこれに対し反市長派の市会の一部有志議員が一方的だと反発し、両者の調停に乗り出し始めた。期待して良いやら悪いやら。

十一月下旬

依然話し合いつかず。建て物はすでに三度の週末キャンプでブロックは平均六段まで積み上り、人の肩の高さまでになっている。だが雨ざらしに林立している鉄筋は赤さびが目立ち、廃虚の感がある。建物の方はこのように止まったままであるが、キャンパーの意志は堅く、建設資金獲得の方向は益々鮮明になり、年末の街

頭募金や音楽会等着々計画と実行は進んでいる。春以来委員長長の白石が交代したがっていたが、副委員長長の湯浅(同大文二)が少しづつ委員長見習いをしてようやく交代する。北海道から出てきてこんな泥沼に入れるのは可愛相なことだ。

十二月中旬

デイスカッションキャンプがもたれ、二日間夜を徹してキャンパーは話し合ったが適当な方策が見つからず。原則論から言うとうりしても一切の妥協は許されないと、妥協をすればその瞬間から運動の目的は「家」の建設だけになってしまふ恐れがある。

昭和四十年一月中旬

調停に乗り出していた奈良市会議員の有志から調停案の打診があった。反対側の意向は地元の市会議員を通じてなされていたようにキャンパー側の意向はあまり通じていなかった。しかし学生にとって最も厄介な年度末試験をひかえ、全員で充分討議することは不可能である。今村さんが元気になって調停活動に加わって働いていることが救いだ。

五局面打開 (S四〇・二月)

二月

調停の日。地元の役員が向う側にずらり、こちらはこれまでずっと調停の中心に動いてきた白石に今村さん近藤先生らそれに奈良女子大の点訳クラブの松沢先生。調停者は市会議員が数名。調停

案の骨子は建て物の名称を「ライ快復者宿泊所」から「ライ快復者社会復帰セミナーセンター」とすること。名称変更によって機能も変化したことを示す為全面的な設計変更をすること。ただし、変更に必要な費用は調停者が負担する。ライ快復者は地元承諾が得られるまで宿泊させないこと等であった。調停会場に臨むまでの白石の腹はこの案を大ざっぱには飲むことであった。暫く活動から遠ざかっていた僕にとってはそのあせりや苦勞は判らず、事前に見たこの案で宿泊拒否の点だけは反対した。昨夏その点について提案した本人が反対の気分になるのは、やはり渦中に居るものと居ないものの感覚の差があるのだろう。今村さんも僕と同じように渦中に入ったのは最近のことであり特に直前に谷川雁さんに会ったことが大きく、この案はのめないと態度であった。全く白紙の近藤先生は出たとこ勝負の姿勢。

調停者が案をたんたんと読みあげている間地元の役員連中は少しづつうなづいている。その後静かなやりとりがある。突然、今村さんと近藤先生が宿泊拒否の件はのめないと、運動の原則論と社会正義の面から強調し始めると、せきを切った如くキャンパーは発言する。こうなると一方的、口のたつキャンパーがまくしたて、とうとう宿泊拒否の項を抹殺して、暗黙の了解事項というこゝとになってしまった。ものはずみとは大変なことだ。

三月上旬

ようやく活動の方向のめどがついた。調停に従ってこの家をつぶ

すことだ。そして設計はやり直し、調停者が大阪市内の共同設計会社を紹介してくれ、費用はこちらが考えなくとも良い。春のキャンプは破壊作業をすることになった。

六破壊から第二次建設へ（S四〇・三月〜六月）

三月下旬

キャンプの準備不足の為キャンパーは少し。だが破壊は簡単。大きなハンマーで片端からブロックをこわしていく。キャンプ中にきれいさっぱりこわしてしまうことだろう。

四月某日

調停者に紹介された設計会社は大阪市北区にある共同設計株式会社であった。営業次長の槻氏及び設計部長の三好氏と設計依来に關する基本的な事項について話し合った。

建物を設計する為に必要なことは、敷地（面積、位置及び地形）総工費、建築様式（木造、ブロック、軽量鉄骨、鉄筋コンクリート、プレハブ等）機能等を明らかにしなければならぬ。敷地については決定しているが、その他の点については具体的にはっきりしていない。この運動の歴史的事実と、現状の適確な認識及び将来の展望を考慮して、運動の当事者が決定していくべきであるが、現時点に於ける具体的事実は調停が成立したことである。我々が拘束されるのは調停書の内容だけであるが、運動全体としてはこの調停の成立は大きな転機になったことは否めない。歴史的に見た場合この転機が運動の一里塚となり、一つの成果として記録されるか、この転機を境に骨抜きになるかは今後の我々の活

如何にかかっている。この建物が建設されてから如何に管理運営されるかは、今後建設と共に話し合いが進められていくであろうが、決定されなければならぬ問題は、将来どのような方向に進もうとも出きる限り順応性のある機能を構えた建物にすべきだろう。

調停書には建物の設計を変更しなければならぬ条項があり、それまで建築していたブロック建築は一応破壊して改めて建築にかからなければならぬし、すでにとりこわした。しかもこのブロック建築に書き直した為に、機能的にも工事的にも複雑なためこの際建築様式も内容も全く白紙の立場で考えようと、白石芳弘（大阪ガスに就職）辻征雄（大阪府庁）湯浅進らと相談の結果まとまった。まず、調停書の中に「宿泊はしない」という条件はないし、宿泊することも可能であること、ついでセミナーセンターといった名称から集会及び集団生活が可能なる機能を備えること、が必要であろう。この為に、機能としての炊事場、便所、風呂、集會室、食堂、成る可く大きな室、畳又はベットの室が必要になる。資金及び敷地の都合から（尤も敷地は定まっているが、資金は不充分、当面の目標として）延べ百坪以下でなければならぬ。これらを考えあわせ、便所（多人数の集會の爲男女別が必要）風呂（出きれば数人が同時利用できるもの）炊事場（一時に約三十人分が調理出きること）集會室（食堂と兼用にして十坪以上あること）寝室は集會にも使える為に畳室にし、襖のとりはずしにより二室が一

室の大部屋になる方がよい等と判断を下した。建物の様式として木造、木造プレハブ、ブロック建、軽量鉄骨、鉄筋コンクリート鉄骨コンクリート等があるが、いずれにするか難しい問題である。様式を選ぶ前提は、それまでFIWCがとってきた運動の方法に従い、建設工事に成可くキャンパリーの労働力を多く使い、できれば建設の主体がキャンプにある方がよいと思われる。資金調達的面から考えても業者に移託する事は難しい。この前例主義的な考え方は委員会を通さず個人的見解で判断を下す場合やむを得ないと思う。理想的には委員会等で、この方法について新しい方法論が出され採択される事があれば望ましい。

四月某日

大阪YWCAで委員会があった。建築の方法についてはやはり、FIWCが主体となってワークキャンプで建設をできるだけやろうと決まり、具体的な話し合いは建築グループにまかされた。

四月某日

共同設計に白石、湯浅両君と共に行く。専門家と共に建築様式について種々議論を行なった。木造建は高度の木工技術が必要とし、キャンパリーの労働力では困難であろうと結論された。鉄骨コンクリートは建築規模から考えて大げさすぎるし、危険度が大い。軽量鉄骨建については溶接工事や雨仕舞の困難等、専門家の意見を聞き入れ避けようとした。この結果、工事労働量は多くなるが建築が少しづつ長期にわたることを考慮して鉄筋コンクリートを

主にしたブロック建築にした。この判断の正否については確固たる自信はない。

四月某日

再び共同設計に行く。前回の話し合いで定まった基本線に従って大ざっぱな室割図面が書き上る。我々としてはそれまで建てたブロック建築の基礎を出きうる限り利用したかったのだが、建築様式が変わった事や、ブロック建築の際、充分な地中調査がなされていないことから安全性の面と専門的な技術の面から利用は放棄せざるを得なかった。設計を進めるに当って一応の設計基準が必要となり業者が依託した場合、鉄筋コンクリート建としては中下程度である坪当り十万円を基準にした。

五月某日

設計は鉄筋コンクリート二階建てで長さが十四米、ゆか七米の長方形で柱は六本の直方体型の建物になった。この規模の建物だと完成すると約二百トンで大鵬が千七百人集まったのと同じになる。この重さを六本の柱で支えるのだから一本当りは三十四トンの重さを支えねばならない。地面に重量物を置くところの程度以上の重さになると少しづつ沈んでいく、この限界を「地耐力」という。普通の土地では大体一米四方の土地に十トン程度の重量がかかっても沈まない。しかし砂地などでは人間の足だけでも沈む。この建築地の地耐力が判らない。設計者としては地耐力が判らねば設計責任はもてないと言われ、ボーリングをすることになった。

ボーリング代は四万五千元。その結果、地表から二米五〇釐掘ると、約十トンの地耐力があり、二米では約七トンであった。それ故基礎を作るのに二米の深さに掘り、柱が一本当り三十四トン支えるのだから、七分の三十四即ち四、八平方メートルの穴を掘ることにした。これは二、二米四方の穴になる。

六月某日

いよいよ基礎の穴掘りを開始。梅雨時にぶつかり、正に泥まみれの窟であった。でも工事再開に少人数ながら意気さかん。一方夜の討論では新しい問題が出てきた。工事の方はこれから再開であるが、この運動も始まってからすでに一年半。当初の中心であった柴地、白石、辻はずでに第一線になし。初心をもっていた連中が去り、運動の途中から参加した人達がこの運動の持続のエネルギーをどこまで持ち続けられ得るか。今までの歴史を見ても同一テーマが約一年で交替しているのは中心メンバーの交替と無関係ではあるまい。同一テーマで世代交替して続け得るや否や。何とか続けたいものだ。当分、この問題に力を入れなければならぬ。一方、工事再開と共に今後の手順を考えねばならない。

六月某日

家を建てる為には膨大な種類の資材と工事が必要であるが、まず鉄筋コンクリートで全体の骨組みを作らねばならない。この骨組を作ることが鉄筋コンクリート建築においては費用の点から言っても、工事量から言っても全体の三分の一に当る。当面の目標と

してこの工事についてだけを考えねばならない。現在の手持の資金は約八十万円。ここまでを業者に依託すると約二百万円かかる。我々自身の手で行なると労働費が助かるが、一体どの位かかるのか計算してみよう。

資材

・ 栗石（基礎の下に入れる大きな石）

大型トラックに四台分 二、八万円

・ コンクリート

大型生コン車で四十台 五六、〇万円

（自分達の手で砂とジャリとセメントを買って練ると四二万位）

・ 鉄筋（太さは直径二、二センチメートルから五〇、九センチメートルまで四種類）

十五トン 五〇、〇万円

・ 鉄筋をしぼる針金と足場をしぼる針金など

一トン 四、〇万円

・ 仮枠を組むのに必要な釘 〇、五万円

ここまでで約百十五万円である。次に道具及びコンクリート打ちをする為に必要を板や材木等である。コンクリート打ちに使うパネルは新品で一枚が四百五十円である。これは大体三回程度は使える。（破損の少い時は四回）我々の建設では一階と二階を分けてコンクリートを打つからパネルは二回使う必要がある。即ち新

品では惜しいので、一回使った中古品（一枚三百円）を買うことにした。柱やハリ等の枠組みはパネルではなく、板と角材で作らねばならないがこれは中古がないから新品を買うことにした。足場丸太は工事期間が短かければあまり消耗しないし借りることも可能でその方が廉価であるが、我々の建設は長期にわたる事が考えられこれも中古品を買うことにした。天井のコンクリート（スラブと言う）を打つ時に下から支える支柱が必要であるが、これは貸資材屋では一本が一日十円である。仮枠を組むのに一週間、コンクリートを打ってから二週間放置して直ちに返すと一本につき約二百二十円で一階と二階と二回で約四百四十円になる。木材の支柱を買うと一本約六百円で結局期間が長くなることや後で木材が残ることから考えて買うことにした。

仮枠材料

・ パネル（中古品）

三百円×三百枚 九、〇万円

・ 足場丸太

長、二五〇本×六八〇円

短、二七〇本×二百円 二二、四万円

・ バタ角（支柱）

十cm角×二m 九、〇万円

一五〇×六百円

・板(一、五cm厚)

六〇坪×千二百円

・角材 五cm角×三m

三百本×一一〇円

道具

・ツルハシ、スコップ、ネリスコップ、

計約三十本

・一輪車(石及びコンクリート運搬)

五台×三千円

・ノコギリ、金ヅチ

・ドリル、鉄筋カッター、鉄筋曲げ

・針金切り(番線切り)

・ハツカン(鉄筋をハリガネでしぼる道具) シノ(足場をくむ道具)

その他に土管やコテ、物差、巻尺、墨付け等細いものが沢山必要である。 総計六〇万円 合わせて、一七五万円です。道具は残

るとしても、あまり安くはない。しかし、この方向で持金八〇万円しかないからやるより仕方ない。

七、二万円

三、三万円

二、〇万円

一、五万円

〇、五万円

一、〇万円

〇、五万円

〇、五万円

六月某日

栗石については、大倭安宿苑の園長さんに便宜を計ってもらって購入することが出来た。コンクリートは自分達で練ると昨夏の経験から、ミキサーを借りてもこれ程の量はとても無理なように思えるので、生コンを使うことにした。鉄筋は関学の藪田さんのお父さんに便宜を計ってもらった。中古パネル及び足場丸太は大阪の機械建設の長岡部長の紹介で入手できた。バタ角、板、角材は奈良や大阪へ行って道具店から購入したが、この点については大倭ブロックの人達、特にダンちゃんや教長さんに大変お世話になった。その他、日元さんが手作りで作って頂いたのも多く、誠に感謝にたえない。

このように資材に関しては少しづつ手配ができ、何とか工事を行なえる目途がついた。

六月某日

基礎の穴掘りを始めてから三回目、六月最後の週末キャンプであるが、今日も小雨模様。穴の深さも人間の背丈ぐらいになり、スコップについた土も雨のためにとれなくなり、仕事は難渋をきわめている。しかし、金重(阪大二) 福田(同大四) 湯浅(同大三)等、キャンパーの意気盛ん。六月の募金も頑張りに約十五万円集める。